

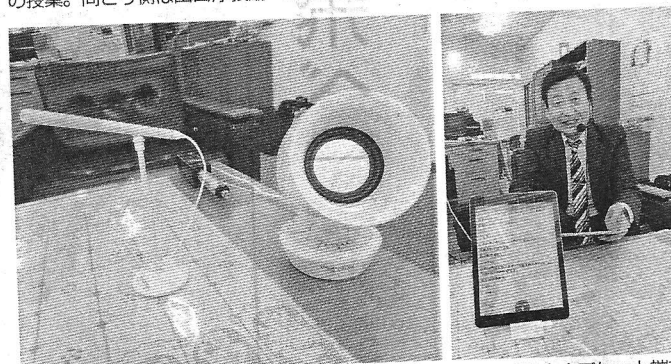
難聴子ども支援

学校内で交流進め 孤立化防ぎ成果も

東京・台東
柏葉中



スピーカーを使った難聴の生徒(手前、後ろ向き)への数学の授業。向こう側は山口淳教諭＝東京都台東区立柏葉中で



聴こえ支援のスピーカ―(右)とマイク(左)

しゃべるとタブレット端末にその文字が出てきます

聴覚に障害をもった子どもたちは孤立しがち。それを防ぐために、東京都台東区立柏葉中学校では、普通学級(通常学級)と難聴学級の生徒との交流をすすめるが、聴こえ支援の音響機器などを活用した授業をすすめています。

「これから数学の授業を始めます」。教員と生徒

スピーカーとディスプレイ

徒が1対1で向き合い「起立、礼」をしたあと、教員の声がスピーカーから流れます。生徒の左前方のディスプレイには教科書のページが映し出されます。

スピーカーは、わずか直径6センチですが、音の拡散・反射を抑える構造です。加えて話し手が発音を明瞭にすることで聴こえは格段に改善されました。

スピーカーを授業で使うようになって1年半。難聴学級の山口淳教諭は「普通、難聴の子どもは補聴器をつけますが、補聴器は雑音も拾うし、音がひずみます。このスピーカーで軽・中度の難聴の生徒は補聴器なしでも聞き取れるようになりました。画期的です」と話します。

威力を発揮しているのが英語の授業。「聞き取りにくい」子音や複数形のSの発音もこのスピーカーでは聞き取りやすい。教える側も安ど感がある。

る。13年にわたって難聴の生徒に英語を教えている渡部秀雄教諭の感想です。

難聴の中1の男子生徒は「小学生のときも英語の授業を受けていたけど、なにもわからないまますごしてきた。この中学校に入って、単語が聞けるようになったとい

います。山口さんは「難聴の子どもの情報が入りにくく、不安を抱えたままだと孤立していきます。情報が保障されると情緒が安定し、学習もすすむ」と情報提供の重要性を強調します。

タブレットで

重度にも対応

しかし、スピーカーが有効なのは難聴が中程度まで。「重度の子どもは聴取は困難」(山口さん)。そこで注目されているのが、タブレット端末です。教諭がタブレットからスマホをマイクがわりにして話す、生徒側のタブレットに話した言葉が表示されます。「最新のタブレットは誤変換が少なく、重度の難聴の子どもにとっては嬉しい道

具になりえます」と山口さん。現在、同校の難聴の生徒は3人。重度の子はいません。「今後、重度の子どもが入ってきても十分対応できます」

一緒に学べる環境づくりを

同校の難聴学級(1966年設置。当時は下谷中学校。2002年に柏葉中に統合)は50年近い歴史があります。この歩みを背景に同校には手話部があり、現在部員は18人。放課後、手話や手話通訳を練習します。同校生徒の多くが指の形を活用した指文字を身につけて難聴の子とも交流できます。学校行事では手話部の生徒が教諭の発言をパソコンに打ち込み、難聴の生徒は小型の端末で、同時に話の内容を知ることができ

ます。

山口さんは「最新の機器が情報格差を緩和してくれますが、何よりも、生きた人間同士の交流が大事」といいます。「聞こえる子は聞こえない子へ歩み寄り、一緒にいて一緒に学べる場をつくることに努めています」